

と問へば、

『青木尾張^二信時^一に預け置き候ひぬ、取つて、上つらん』

と答へ、急ぎ、信時を招けば、信時、母衣串を捨て、母衣衣のみを、顔に纏ふ。

信豊、取つて、正備に渡せば、又も、馬を驅つて、馳せ還る。

勝頼、初めて、安んじ、母衣を取つて、腰に挿さむ。

往復四五町の間、勝頼、馬を駐めて、待つ、復たも進まんとすれば、馬疲れて、更に動かず。

正備、追へども、進まず、叱すれども、尙、進まず。

笠井清秀、此體を望み見て、馳せ來り、其馬を、勝頼に進め、

『イザ、此れに乘らせ給へ』

と白す、勝頼、聞かず、

『我れ、此れに乘らば、汝は、討死するの外あらじ』

と言へば、滿重、重ねて、

『命は、義に仗つて輕し、今、君に、一身を捧げ奉つら

ん、幸ひに、我子を取り立て給ふべし』

と述べ、強いて、馬を進め、又返り戦うて死す。

時、正に、未の刻、炎氣、燃ゆるが如し。

勝頼、胃を脱して、正備に授く、正備、敵を拒ぐに忙はし、乃ちをうて、道に捨つ。

小山田彌助、後れて來る、斯くと見て、驚き、

『これ諏訪法性の御胃にあらずや、御秘藏の御寶を、捨て給ふこそ、残念なれ』

急ぎ、拾ひ取りて、還り來る。

勝頼、僅に六騎と與に、小松ヶ瀬を渡りて、武節城に入る。

此日、卯より、未に至る四時、戦を接すること、五十八合、

甲州勢の死するもの、凡一萬二千人、宿將、名士、殆んど盡く。

他日、天目山の滅亡、實に、此役に基づく。

五十一

尾參の兩軍、終に、大に克つ。

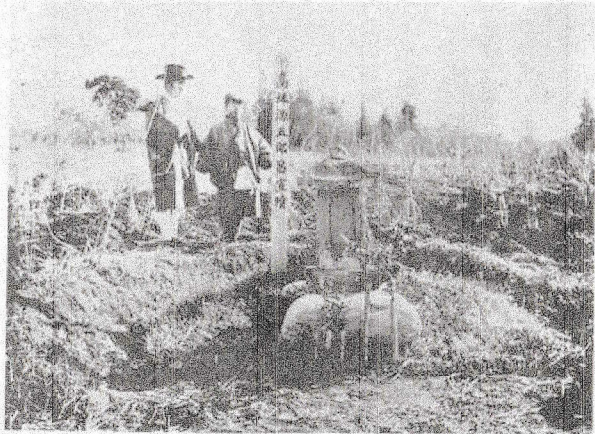
家康、信長に向つて、

『此勢ひに乘じて、甲斐に附入り候はん、武田を亡ぼさ

んこと、暇く間に候べし』

高坂昌澄の墓

東郷村大字川路字山川路に在り、木柵に昌澄とあるは誤り



と説け

ば、前

田利家、

木下秀

吉の二

人も、

亦、進

撃の利

を説く、

信長、

聞き入

れず、

『味

方の

勢、

皆、

疲か

る、力を養うて、再舉を計らんこそ、好けれ』

と告げ、終に、兵を收む。

家康、信忠、長篠城に入り、奥平定昌を延き見て、籠城の勞を賞し、大に、宴を張りて、諸將士を饗す。

信長、岐阜に凱旋す、途中、復た熱田に養して、戦捷を謝し、新たに社殿を修す。

家康、亦、岡崎に凱旋す、數日を経て、岐阜に抵り、懇ろに來援の勞を謝す。

信長、特に快然たり、

『御邊の君臣、我が爲めに、能く東面を打ち給ひたればこそ、輒すく、上國をも、平定し得たるなれ』

と告げ、其恩從の將士を、延見す、奥平定昌を見て、

『汝、僅か五百餘人の小勢を以て、勝頼の三萬五千餘の

大軍を、引き受け、五月朔日より、二十一日まで、堅固

に、籠城せしこと、實に、古今無双の勇士かな、以來、

武者之助と名乗り候へ』

と告げ、尙、偏諱を賜うて、名を信昌と改めしむ。

又酒井忠次を召し、高巢山攻略の功を、敬稱して、薙刀を